

2019年

6月10日

第327号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木644番地1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

先人たちから学び直そう

園長 児嶋 草次郎

宮崎は、例年より早く5月末日に梅雨に入りました。水田の稲は今年は雑草の稗（ひえ）も少なく、順調に育っています。園庭のアジサイとカンナは、我がシーズン到来とばかりに、次々に元気よく花を開き始めています。

昨年は「友愛通信」でアジサイを「プラス思考を喚起させる花」と紹介し「アジサイを見てインスピレーションを働かして、“自戒自規”でこの雨期を乗り越えて」と祈りをこめて書きましたが、現実とは逆の方向へ進みました。6月頃から中学生男児の入所が続き、家にいる頃の自由気ままな価値観を園内に持ち込もうとして、トラブルが続いたのです。10年ぶりに無断外出（園から逃げ出すこと）もありました。児童相談所の皆様には大変御迷惑をおかけしました。何より、子供さんをあずけてくださっている親御さんには御心配をおかけしました。

これから夏にかけて、思春期の子供たちの緊張感もゆるんでいき、いろんな誘惑に流されたり、友人間のトラブルが生じたりし始めますので、職員たちは、気を引きしめなおして、より子供たち一人ひとりに寄り添い、厳しくやさしく指導していかねばなりません。先手を打った指導として、6月には、中学生以上の子供たちは「将来の夢」作文を提出することになっていきます。担当職員がその子に合った資料を提供しながら、これから自分は何を志すのか考えさせ、また具体的に希望進路や職業等を書かせるのです。

蒸し暑いこれからの季節はまさに、「遠き慮（おもんばか）り無ければ、必ず近い憂い有り」の世界です。将来の夢や志がないと身の回りのトラブルや誘惑にまきこまれて、必ずマイナス思考におちいたり、悩みや鬱（うつ）を抱えるようになるということです。そうさせないために、この6月には、将来についてしっかり考えさせるのです。もう20年以上続けている指導ですが、それなりの効果もあり、結果として大学進学者増につながっているのだと考えています。

子供たちの人生を左右する指導であり、職員たちは真剣に向き合っていてほしいと願っています。私も一人ひとり書いたものをじっくり読ませてもらうことを楽しみにしています。

さて、この時期、不幸な事件が東京都練馬区で起きています。76歳の元高級官僚が我が子（44歳）を殺害したのです。新聞等の報道によりますと、5月下旬におきた川崎市の小学生等20人に対する殺傷事件に誘発されて、我が子が同じような事件を起こすのではないかと、自分に対する暴言暴力の中で考えた父親が、それを事前防止するという動機で危めてしまったのです。高学歴で農林水産省次官まで登りつめた、言わば人もうらやむ人生の勝利者のはずでした。その裏で我が子のしつけや教育でずっと悩んでおられたとは誰も気付いてなかったとか。親として我が子の社会的自立を切に願い祈りながら、こういう結末になろうとは一。息子を犯罪者にして世間から裁かれるより、自分が代わりに犯罪者になりその罪を背負おう、父親として精神的にギリギリまで追いつめられた結果としての決断だったのでしょう。このように追いつめられている親御さん方が、わが国には60万人から100万人いると言われていています。連鎖反応がおきないことを祈るのみです。

このような事件は他人事ではありません。親への強い不信や恨みを抱える子供たちを多く託されて来た私にとっては、若い指導員時代から、親子関係の再構築は悩みでもありました。

社会に出て人間関係を築いていくにおいてその基盤となるのは、信頼関係です。親への恨みや憎しみを抱いたまま社会に出ても、他人が信じられないわけですから、人間関係をうまく作っていくことはできません。そこから次々に挫折していくことになります。その44歳の青年の今までの人生はどのようなものであったのでしょうか。

こういう事件が起きる度に思い出す言葉が論語の中にあります。

「弟子（ていし）、入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹（つつし）みて信あり、汎（ひろ）く衆を愛して仁に親（ちか）づき、行ひて余力有らば、則ち以って文を学ばん」

子供は家においては親孝行をし、外に出ては素直に控え目に行動して信頼されるようにし、みんなを愛して思いやりの気持ちを持つようにし、そういう生活をして、余力があれば勉強をする、というような意味になるのでしょうか。つまり、勉強の優先順位が一番最後になっているのです。まず、親への感謝の気持ちを持つこと（敬いの気持ち）が優先順位が一番です。約2500年前の孔子がそう言っているのです。おそらく常識ある人々の世界では、それが人間の心が育つにおけるの原理原則であるとされていたのでしょうか。

そういう知恵・精神文化は人間世界において代々伝えられ、例えば吉田松陰もその私塾「松下村塾」の塾則5か条のうち、1条2条には次のように書いています。

- 一、両親の命には必ず背くべからず。
- 一、両親には必ず出入りを告ぐべし。

両親を敬うことを、松下村塾で学ぶことの大前提にしているのです。

さらに、石井十次の学んだ高鍋藩の藩校明倫堂の堂則 18 条の第 1 条 2 条には次のように書いてあります。

- ・入学必ず制あり

明倫堂に学ぼうとする者は、まず父兄の許しを受け、礼服を着けて師範の家に行き入学を請う。

- ・凡（およ）そ此（ここ）に学ぶ者は必ず朔望の儀を厳にす。

毎日一日（朔）を十五日（望）には早朝に起き、洗面して髪を整え礼服を着け、父兄にあいさつしその許可を受けて師長、親族に回礼し、帰って父兄に報告する。

つまり、明倫堂に学ぼうと思ったら、まず父兄に許可を受けること、1 日と 15 日にはまず父兄にあいさつをし、その許可を受けて先生方や親戚の家に挨拶して回れと言っているのです。あくまでも親を立てようとしているのです。親を敬うことが人格形成の始まりと言っているようなものです。

戦後教育を受けた私たち団塊の世代は、戦前の価値観を否定することから人生スタートしています。おそらく息子を殺した元官僚の方も同じでしょう。もしかしたら、価値観の混乱する中で、子育てにおいて、どこかでボタンのかけ違いをってしまったのかもしれない。私も子ども達を育てる過程において、色々と失敗し迷った末に、先人たちに謙虚に学ぼうと思い始めました。

そして子ども達のロッカーに家族の写真を飾る「心の空間」と呼ぶ言わば神棚を作り親や家族の写真を飾らせ、論語や松田松陰等について学び（ちなみに松陰が処刑される前に呼んだ歌「親思ふところにまさる親ごころ けふの音づれ何ときくらん」は、最高の親への思いやりでしょう）、また、石井十次の旅行教育に習って、先人たちの心の跡地を訪ねる旅行も始めました。

親から虐待を受けたりネグレクト状態に置かれて来たとしても、せめて、「生んでくれてありがとう」という気持ちは持ってほしい。それが子供たちに対する私の願いであり祈りなのです。そういう心の状態に持っていけた時、「彼の運命は変わり始めるのだ」。それが私の確信となりました。

子供たちみんなにその教育が通用するわけではないのですが、「親への感謝と敬意」への指導を親子関係の再構築にあたっては、原理原則とすべき、日本人としての先人たちから受け継ぐ知恵だろうと思います。

この親への敬いの気持ちを育てるしつけ・教育は、何も児童養護施設だけの問題ではなく、保育園の保育においても重要課題です。何だかんだと保育について論じる前に、「お父さんありがとう、お母さんありがとう」と素直に言える子供に育てることを考えるべきでしょう。日々の保育の中で職員自身がまず感謝の気持ちで親御さん方に接することから習慣化していくのでしょうか。

ここで少し話題を変えます。6月4日に石井記念友愛社の新卒・中途採用含めて32名の法人内新人職員研修を研修館で行い、私が1時間半くらい話をしました。昨年度までは、30分程度しか時間が与えられなかったのですが、今年度はパワーポイントを使ってじっくり話をさせてもらいました。

この数年職員たちに対して感じるのですが、人材確保が難しい状態になって来て、その選考にあたってハードルがどんどん下がって来ており、能力・資質においてレベルが落ちて来ているのではないかと感じます。色んな意味で自律性に欠ける職員も入って来ていると感じます。先ほどから書いているようなことは、職員たちにとっても他人事ではないということになります。「友愛通信」には繰返し私の思いや願いを書いて来ていますが、はたして職員たちはどれほど理解してくれているのであろうか、ただ分かったふりをしているだけではないか、そんな疑念も湧いて来ます。

若い職員たちがこれからの仕事をしていく上において、何が一番重要なのか。やはり志でしょう。自分は何のためにここの福祉現場で働くのか、自分なりに整理しておく必要があります。単なる飯の糧では、ちょっとしたトラブルで挫折してしまいます。そしてもう一つ大切な事は、自分の目の前の仕事が、石井十次や先人たちの実践・試みとどうつながっているのかを考えるということでしょう。私は福祉文化と呼んでいるのですが、この福祉の仕事は決して政治家の作った法律や官僚・学者たちの作ったルール・マニュアル等だけで組み立てられているわけではなく、先人たちの血と汗と涙の結晶物でもあるということを知っておく必要があります。

例えば、今、児童養護施設の集団主義的な養育が否定されています。集団力動をマイナスにしかとらえず、その弊害だけが指摘され、“家庭的”という外面的な形にこだわろうとし始めています。子供たちのグルーブを小さくして家庭的な雰囲気になれば、抱えている問題は解消し、自然に自立していくと多くの関係者が信じこんでいるようにも見えます。

私に言わせれば、かえって本質的な問題・課題が見えなくなっていく可能性もある。人間は霊長類に属する動物であり、動物としての本能も持っており、動物の世界でおきることは人間の世界でも起こり得る。

今から200年くらい前、大分日田市に広瀬淡窓が「咸宜園」という私塾を作っています。友愛園の中・高校生たちは、3年に一度は必ずこの跡地を訪ねその文化を学ぶことにしているのですが、多い時には全国各地から200人の志を持った若者が集まり、寝食を共にしながら師弟同行の塾舎生活をしながら学んでいます。その広瀬淡窓が次のように書いているのです。

「誠に血気未だ定まらざる輩のみ。ここを以って同居する者多き時は種々その悪習を生じ、その弊事挙げて述べがたし、凡（およ）そ在塾中長は幼を侮り、強は弱を凌（しの）ぎ童弱の徒は身を措くに処なし。」

つまり、集団生活をしていると、いじめみたいなことは発生すると認めているのです。そうさせないために、淡窓は塾則（ルール）を作り、「職住制」という自治的組織（役割分担）を作らせ、自律的な集団生活をさせようとしたのです。

西郷隆盛は薩摩の郷中教育の中で学んだといわれていますが、私たちが郷中教育から一番学ぶべきは、リーダー養成の重要性でしょう。西郷も「二才（にせ）」という子供たちグループの長をつとめることで、多くの知恵や自律力を身につけたと思われま

す。以上の二つの集団は男児だけのグループですが、現代は男女平等、児童養護施設は、男女混合の集団生活ということになります。人間が動物である限りにおいて、油断すれば当然性の問題も起きます。いじめや性の問題は、互いに他人同士である限りグループを小さくして家庭的雰囲気にしたからと言ってクリアーできる問題ではありません。かえって見えなくしてしまう危険性もあります。

先人たちがいかにしてその人間としての宿命を乗り越えて来たのか、そしてその文化を築いて来たのか、謙虚に学びながら一步一步前進していきたいものです。若い職員たちも子供たちも、自分の人生を豊かなものにするために、親を敬い、感謝の気持ちを忘れず、将来への志をしっかりとって、目の前の壁を一つ一つ乗り越えていってほしいと強く願います。